

「ターミネーター」のなみだ

三好学さん佳作入賞おめでとう



第一八回ほのぼの童話館、創作童話募集四、〇一六編の応募の中から「ターミネーターのなみだ」で見事、佳作に入賞されたのは利用者の三好学さんです。その童話のあらすじを紹介しましょう。



「勉くんのパパであるおじいちゃんはターミネーターの映画に出て来る人間そっくりのロボットのようで、革ジャンを着て大型バイクに乗っています。秋になると、銃を背中にしょってキジを撃ちに行きます。おじいちゃんは「俺はターミネーターなんだからね。血も涙もないんだよ」と誰も今までおじいちゃんが泣いたのを見たことがありません。ある日勉くんのパパの妹の純子お姉さんが結婚することになって結婚式の日、純子お姉さんがパパにお礼の挨拶をする時ターミネーターそっくりのおじいちゃん目から涙があふれ、勉くんはそれを見てやっばりおじいちゃんはターミネーターではなかったのだなと思った」というお話です。童話のアイデアが浮かんでから二週間ぐらいで作品が完成しました。自分でもまさか同じコンクールで二度入賞出来るとは思ってなかったのです。それだけにとでも、うれいんです。このように童話作りをし、入賞することが出来るのも三恵ホームの環境が良いから出来るのでそれをとても感謝していますと話される三好学さんですが、これからもみんなを楽しませてくれる童話をたくさん作ってほしいです。

見える仕事と見えない仕事

理学療法士 水田 秋敏

手が動きにくい人、むやみに「努力が足りない」とか「重りをつけて筋力をつけよう」と言う人がいるが、療護施設では間違っていることが少なからずある。訓練する前よりも悪くなる場合があるのだ。

何が間違っているのか？

ある一つの例は、ある関節を自力で動かそうとするとき、近くの関節が「あるパターン」で動く場合である。「このようなときは、場合によっては全く筋力強化を行わない方がよいときもある。緊張が高まって、動きが悪くなる場合があるからだ。」

よく、「理学療法士（PT）の仕事って、私にもできそう」と言われる方がいる。ある意味、その通りである。やっていることと自体は、むしろ器用な人や力のある人の方がうまくできると思う。

しかし、どのような運動をどのような時期に行うかを計画判断し、状態を把握しながら施行することはPTでないと難しい。

これは作家の作業でも同じようなことが言えるだろう。

どんなことをテーマにするのか、どんな切り口で書くのか、どんなリアリティを出すのが難しいわけ、書くこと自体は楽だと阿刀田高は言う。このようなことはどの仕事でも共通なのだと思う。

しかしながら、最初に出した「手が動きにくい人」の例では、リハビリの勉強などしてない人の方が良い訓練方法を知っている場合もある。それは理論よりも体験で知っているのである。鵜呑みにはしないが、私はこのような情報提供をどちらかと言えば積極的に取り入れることにしている。年令・性格・疾患だけでなく利用者の個人差を尊重しているからだ。

だから常に向上心を持ち、いろいろ興味深く探索することは、その後の仕事の見えない内容が変わってくると思っている。そして、それはやがて、仕事の見える部分を変えることにつながると考えている。

